

# 基調講演とパネルディスカッション

## ヒューマニズムとしての古典研究

英知大学

今道 友信

### ヒューマニズムとしての古典研究(シノプシス)

#### 1. はじめに

- a) 主著『同一性の自己塑性』『美の位相と芸術』(東大出版会)『studia comparata de aesthetica』(東大文学部)『エコ・エティカ』『自然哲学序説』(講談社学術文庫)『現代の思想 20世紀後半の哲学』(放送出版協会)
- b) 『アリストテレス詩学訳注』(岩波書店)“アイスキュロス・テーバイに向かう七将”『ギリシア悲劇全集第一巻』(人文書院)

#### 2. 古典研究の四大別

- c) ① 地域的歴史研究
- ② 専門学問としての古典研究(古典学)
- ③ 対象の要求する古典研究
- ④ 基礎教養としての古典研究
  - α introduction
  - β translation
  - γ original text
- d) ヒューマニズムとしての古典研究の二種
  - c ②
  - c ④ γ

#### 3. 基礎教養としての古典研究の危機

- e) 技術連関としての現代社会の精神状況
- f) 専門研究の向上・精密化と教育の分化への対策
  - 後継研究者
  - 一般教育

#### 4. 古典の字義

(古がもし頭骸骨であるとすれば、典は髀であるから、)

- g) classicus ← clavis(船隊・艦隊) Romaの国の危機  
貴族階級・良書(古典) を救う人間の精神の危機を克服  
[prole → proletarius]

#### 5. humanism human(人間的)を強調する主義

- h) humanとは何か。  
言語をもつ。言語 動物的音声記号
- i) 言語の粹としての古典
- j) umanistaの伝統の意識的復興  
Humanismus ↔ Philanthropismus(Niethammer)

#### 6. 20世紀の特色のひとつ

- k) 広義のhumanismによる東西の古典相互理解、文化的融合の可能性、Semi-humanismとしてのParochialismからの脱却
- l) μίμησις(representation) → expression,  
字意 → 写生

#### 7. 理念に関する逆現象の同時展開

- m) egologicalな個人(persona) → responsibility  
義 → 良知
- n) 相補性の確認と文化的相対性の確認。同一性の追認。

#### 8. 人類に開かれて

- o) 古典としてのaxiologia
- p) 言語淘汰の時代 神話亡失の危機

#### 9. むすび

- q) ヒューマニストとしての古典研究の定着への願い
- r) 古典研究は書齋におけるタウマゼインであること

ただ今、大変ご丁寧なご紹介をいただきました今道と申します。1時間、時間をいただきましたので、その範囲内でお話しいたします。

お手元にお持ちだと存じますが、aから始めてrまでの項目の並べられたシノプシスにそってお話し申し上げようかと存じます。

[ 1 ]の「はじめに」でございますが、今、ご丁寧にご紹介くださいました私の仕事は、a) 現代の哲学、美学や倫理学を含めての広い意味での哲学、それが私の本当の仕事でございますが、そういうことを勉強するためには基礎教養として古典を読まなければならないという考えで、b) 古典の仕事も多少はございます。そういうことが縁で、こういう立派な会にお呼びいただいたのだと存じます。私が古典の翻訳や古典関係の全集に関係することができたのは、その計画が1950年代から1960年代の初期に立てられた計画だったからなのでございまして、例えば、ギリシア悲劇の訳にいたしましても、人文書院のギリシア悲劇全集でアイスキュロスの一つ受けもっておりますが、昔だったからなのです。現代は、岩波書店から1編について1冊ずつと言ってもいいくらいの立派な訳や注釈が出ておりますが、こういう時代ではなかったから、古典の仕事が私にも回ってきたというような次第でございます。アリストテレスの『詩学』にしましても、あの訳注書の企画された時代が1960年代でしたから私が選ばれたのだと思います。

私がお話しできることは、題にもございますように、「ヒューマニズムとしての古典研究」ということでございます。その面から見て、もしも何か古典学の再構築に関してお役に立つことがあればと考えたのでございますが、それが自分でなかなか出てまいりません。ですから、私のかねがね考えておりますことを申し上げることにいたします。

それで、[ 2 ] 古典研究の分類でございますが、私の考えでは、古典研究には大別して四つの大きなカテゴリーがあります。一つは、①「地域的歴史研究」がございまして。この場合には、記録としての文書がほとんど全部、古典という名で一括されてしまうのではないかと思います。ですから、アクシオロジー、すなわち価値論的に古典と認めるかどうかという考えは別として、古い文書というそれだけで古典と呼ばれ、そういう扱いを受けることもあります。地域的歴史研究とは、単に、いわゆる歴史学の歴史ばかりではなくて、思想史とか、中には群小の宗教文書や野蛮国の法典など、また商取引の記録など、本来古典的価値をもたないような文書でもこの中に入れてよろしいのではないかと思います。

2番目に挙げなければならないのは、②「専門学問としての古典研究」。これが古典学という名にふさわしい

ものだと思います。専門学問としての古典研究ということになりますと、地域的歴史研究で、文書すべてが古典の扱いを受けるということとは、多少違うと思います。歴史研究というよりは、フィロロギー（文献学）の見地が大事になってくるでしょう。

3番目は③「対象の要求する古典研究」。例えば、医学を勉強しよう、ということになれば、医学のための古典としてどんなものがあるのだろう、ということになれば、オルフェウス関係の文書も対象になるろうか、あるいはヒポクラテスも考えなければならない、というふうにして考え出されてくる古典がございまして。それは、いわゆるヒューマニズムの古典研究から言うと第2級のものであっても、これこそがこの学問領域では第1級のものだと扱われることがあろうかと思っておりますので、やはり、1, 2, 3の区別は必要です。

最後に、4番目には④「基礎教養としての古典研究」があります。この基礎教養としての古典研究には、横のほうに小さく書きましたが、 $(\alpha)$ ,  $(\beta)$ ,  $(\gamma)$  という3通りの種類があると思っております。 $(\alpha)$  は、古典的な思想とか、あるいは古典的な物語などを、イントロダクションとして人々に語り伝えるということも古典研究のごく初歩のいとなみとしてあるだろう古典の、ごく概略的な紹介なども、だれも紹介しなければ次の世代には古典のことは何もわからないわけでございまして、そういう説明も古典研究の中に入ると考えられます。それから $(\beta)$  としてトランスレーションでございまして、これは要するに、そういうような話から啓発されて、古典を翻訳でも読んでみようということで、本物を読むのですけれども、翻訳で読む勉強です。最後に、 $(\gamma)$  としてオリジナルテキストの研究ということになります。このオリジナルテキストの読み方は、もちろん対訳を使いながら読む読み方と本式に研究していく読み方とは違いますけれども、詳しい区別はここでは述べなくてもよろしいかと思っております。要するに、古典研究はこの四つの大きな種類があるだろうと思っております。

[ d ], 「ヒューマニズムとしての古典研究」ということがしばしば言われますが、これはどういうものかといえますと、上の4種のうちの二つがそれに当たるのではないかと考えられます。一つは、2の「専門学問としての古典研究」という本当にフィロロギーの専門研究、これもヒューマニズムという名前の中に入る場合がございます。もう一つ考えておかなければならないのは、ごく程度の低いという悪いのですが、例えば、テキスト校訂のようなことはしない、でき上がったテキストに従って、しかも字引を引きながら、その方面での評判の高い翻訳を参照しながら、しかし、原典を読んでいく、というようなものもあります。それにCの④の $(\gamma)$  がそれに当

たるのではないかと存じます。

私が[3]でお話したいことは、「基礎教養としての古典研究の危機」という問題であります。古典学がこういう新しい試みのようなシンポジウムでもやることのできるというくらいに、盛んになっていることは事実なのでございますが、その具体的な状況、つまり古典研究の一般的な状況を見ますと、どこの国でも、1950年代、60年代の大学の状況に比べますと、一般学生における古典研究は、かなり退潮しているというか、退化している状態でございます。米国やフランスや、ドイツに行きましても、私どもが訪ねるところはまず大学か研究所か書店でございますが、その書店で、昔は書店の一部屋全部古典の教科書やテキストブックや研究書で埋まっていたところに、今はどこでも新しく盛んになってきた学問、文化人類学や社会心理学といった書物が並んでいて、行くたびに、紙がだんだん小さくなって、しまいには古典専用の棚がなくなってくるという例がたくさんございます。

それはどうしてだろうか。例えば、日本の例で申しましても、私が大学に入学いたしましたのは、1940年代でございます。1940年代に大学に入学いたしますと、私は哲学を勉強したのですが、哲学の学生は少なくとも、西洋哲学をする者は、3年間のうちにギリシア語からラテン語かは絶対に取らなければなりません。東洋哲学をする者は、中国語を取るの当然でございました。インド哲学は今でもそうだと思いますけれど、サンスクリットを習得しなければならぬというふうになっておりまして、一般の西洋哲学をする者も、ギリシア語からラテン語はなるべく両方取らなければならぬというふうになっておりましたが、今はそういうことはございません。

ドイツやフランスの高等学校でも、ギリシア語とラテン語の両方を学習しなければならなかったのが、一方になってみたり、現代の人文科学を勉強する場合には、それさえも必ずしも要求されないという制度の改革がございまして、基礎教養としての古典研究の一般性ということ、残念ながらある程度狭められてしまっていると思います。

そのかわりにどういうものがいま盛んに行われているかと申しますと、大学でも、私どもの大学のように小さな大学で、なんとかして受験生を集めなければならないというときに、呼び物の一つのようにして、古典研究や専門の研究ではなくて、私が一番憂えておりますのは、就職の便利のためにも、コンピュータの講座がとって代わってきていることです。例えば、コンピュータの機械があってそこで50人一緒に教わることができるという施設がございまして。コンピュータは実際に古典研究にも大いに役に立つので、それでよしいのですけれども、そういうふうなものも盛んになってきています。そして一

応ギリシア語ラテン語ベルシア語など古典語のために五十冊もギリシア語辞典をそろえることはありません。そうしますと、やはり技術連関としての現代社会の精神状況の中で、古典をどういうふうな教育の中で生かしていくのかということは、我々が新たに考えておかなければならない問題だと思います。それについていろいろ申し上げたいことはございますが、これは皆様が現代社会を見れば、その中で古典がどのように扱われているのか、その理由なども、私がここで申し上げる必要もないと思いますので、[f]のほうに入ります。すなわち、古典の専門研究の精密化です。

これは新しい大きな問題ではないかと思えます。つまり、専門研究の向上ということがあり、専門研究が精密化するということが、教育が古典に関して分化している、分化しなければならないということへの対策が、いろいろな国の、いろいろな大学で、我が国でも、まだ十分に考えられてはいないし、かりに考えられていても、十分に実施されていないのです。つまり、後継の研究者を養成するという点においては、日本の大学も、その他の国々の大学も、古典研究に関しましては、そのレベルも熱意も昔よりももっと強いと言ってよろしいかもしれません。いろいろな大学でも、昔は、その地に行かなければ、例えば、オックスフォードにいる人が、古典のテキストで、ヴィンドモネンシスのテキスト（ウィーンにあるマニスクリプト）を見ようと思えば、どうしてもウィーンまで行かなければならぬませんでした。その旅行ができないときは非常に不完全な写真版で、欄外の書き込みが判読できないようなものをやっとならんでいたのも、今日いろいろな形で、世界のどこにいてもほとんど現物と変わりのない複写版を読むことができ、マイクロフィッシュで読むというようなこともできます。また、どうしても原物を見るにしても、そこに行く旅行も簡単になりました。新しいコンピュータを使って、資料がどこにあるかというようなことも直ちにわかるようになりましたので、専門研究はこういう条件面での利便からも本当に向上してきていると言ってよろしいでしょう。

これについて、私は思い出深い話があります。有名なヴィラモーヴィッツ・メレンドルフの高弟の二人、フリートリヒ・クリンナー、ホラティウスの研究などで有名なラティニスト、それから、カリマコスの研究で有名なルドルフ・プファイファー、このふたりが、あるときクリンナー教授のお宅でクリスマスのお祝いのディナーを共にするということがございました。たまたまミュンヘンにおりました私は光栄にもその場に招待されたのです。そのときに、ルドルフ・プファイファーの言うことには、「ヴィラモーヴィッツ・メレンドルフ先生が生きておられたら、私が出したカリマコスの本などを見て、褒めた

かどうかはわからない」ということでした。どうしてかと言うと、プファイファーのお考えでは、「ヴィラモヴィッツ・メレンドルフは本当に古典中の古典というのを大事にする先生だ。あまり古典中の古典を大事にできそうもないような人に、こういうものをやれとって、それまでおろそかにされている周辺のテキストを課題として与えた。クリンナーさんは非常にまじめで、スケールも大きい学者だったから、クリンナー先生にはいいテーマを与えられた。私にはいつも小さな叙情詩ばかりを与えてくださった」というようなことを冗談まじりにお話しになりました。非常に謙虚な方でしたから、そういう言い方をしながら、御自分が「ある程度恐れていることは、今度、私の弟子は、私（つまりルドルフ・プファイファー）の研究でも漏れているような人々の研究に一生尽くすようになるだろう。そして、だんだん小さくなって、しまいには、古典研究という研究室はなくなって、カリマコス研究所とか、カリマコス学会とか、そういうようなものがどんどんできていくようになるだろう。その研究もどんどん細分化して、カリマコスの動詞の研究の研究史...となり、ホメーロスなんか知らないカリマキストが出てくる」と、これはもちろん冗談ですけども、そういうふうなお話をしておりました。

私は、専門研究の向上・精密化、そして、後継研究者を厳密に、そして細分化して育てるということによって、古典学はますます学問として進化していくと同時に、そのあまりにも細分化した高度なセミナーや講義には到底ついていけないような一般古典愛好者、哲学ならば、プラトンやアリストテレスを、それも主著に関して勉強して、ギリシアの詩であれば、もちろんカリマコスも大事な1人でございますけれども、まずは何としても、ホメーロスやヘシオドス、あるいはアイスキュロスの悲劇、そういうものを、ある程度の語学力で、わくわくしながら読んでいくというような程度の一般古典教養に対する十分な教育が行われなくなっている状況はあろうかと思えます。

このことは現実に、私の知っている限りでは、日本の大学でも、諸外国の大学でも認められることです。古典学のセミナーで語られていること自体は、30年前、40年前に比べるとはるかに精密になり、はるかに高度化されていますが、そこに参加する学生数は昔のように100人も200人もいたのとは違って、本当に限られてきています。上級セミナーには、昔は、古典に関してそれほど専門的な研究をするということを目指して持っていない人でも、つまり私でも加わっていたのですが、今はテキストを校訂する、パレオグラフィー、すなわち古文書学の知識がなければ参加できないような高度の演

習になっている研究室になりますと、後継の研究者は養成されるのですが、一般の古典教育はだんだん衰えていって、大学研究室の状況、図書館の公共機関での貸出の状況を見ても、それから大学出版会で出版される古典の書物の量に関しても、減っている状況が認められます。これは私どもが、大学の古典研究の学問性の向上進展を期するとともに、大学の中における古典研究の一般教育における退化に対する防止策をも考えなければならない情勢だということの自覚をすべきことです。

[4] 古典の字義にまいいりまして、古典ということの意味をもう一度考え直すことも必要ではないかと思えます。古典の「古」という字は、中国の古い字、いろいろな意見がございますので、それについてはお詳しい皆さんもいることですが、しかし、「古」がもし一説のように、固い、何か頭蓋骨の象形文字であるとすれば、「典」は猫脚の机の上に巻物がおいてあるという象形文字であることはほとんど確かでございますから、古典は確かに大切にされている古い書物で、多分著者は死んでいて、その精神がそういう形で大事にされる、読む人は、自分と同時代ではないものではあるが、しかし、いつの時代でも大事なものだ大切に読む書物であるということになるかと思えます。ですから、あがめられるべきものと言ってもよろしいかと思えます。ただ宗教のようにしてあがめられるのではなくて、研究対象としてあがめられるものだということです。そして、死を超えてあがめられるというので、ある意味で、永遠的な価値を持つものであるということになりますでしょう。

g) そして、外国語、私どもにとっては外国語であるいろいろなヨーロッパ関係の言葉で、「クラシックス」という現代語がどこから来たのかという語源を考えてみますと、古典の意味はより明瞭になってくると思えます。西洋関係の古典の方には自明のこととは存じますが、一般に古典を考えるということで、周知の事実をここでもう一度繰り返します。classicusはclassis、すなわち船隊とか艦隊という集合名詞から来ています。ローマの国家の危機を救うために、ローマの国家がほかの国に攻められるというようなときに、国家に艦隊を寄付することのできる人、1隻の船ではなくて、艦隊を寄付することのできる人、そういう富んだ大貴族のことを艦隊的という意味でclassicusと言ったのがこの語の始まりでございます。

最初はクラシックスはこのように、国の大事に当たって何隻もの艦隊を国に差し出すことのできるような人ということだったのが、次第に変わっていきまして、人間の精神の危機を克服するに足るような、すばらしい言葉や考えを内蔵している書物、そういう書物をクラシックスと呼ぶようになります。この国家の危機のときに、

pröle, すなわち自分の「子供」しか差し出すことができない貧乏人を proletarius という単語によって表してありました。クラシックスという単語はもともとは国家に甚大な寄与をなしうるということで、多少スノビスティックな、貴族というような意味だったのが、人間の精神の危機を克服するに足る言葉や思想内容を内蔵している書物をクラシックスと呼ぶようになったということを考えてみますと、そうならば、それが何であるかは別として、絶対に人間はクラシックス(内的な力のある良書)から離れてはならない。何をクラシックスとするかは別として、クラシックスがなければ、古典がなければ、人間が必ず経験するに違いない挫折や危機のときに、それを救う縁(よすが)になるものはなくなっていくのです。そのことを考えてみますと、クラシックスなき人間社会というのはあってはならない、ということになるだろうと思います。

もしも、それが我々の書いた書物だけで十分だと言うとすれば、それは我々の生み出したもの、プロレー、自分の子供たちしか役に立つものはないというのだったら、それはプロレタリアス、文化的プロレタリアスです。社会的なプロレタリアと違って、文化的プロレタリアは、自らを過去の全世界に対して、奢り、誇るような非学問的な主張にすぎないということになります。ですから、やはり古典、つまりクラシックスは絶対に私どもは持っていなければいけないということになりますでしょう。そういうことを考えたときに、私は、研究者だけのクラシックスではなくて、本当に全人類のためにクラシックスが必要で、全人類のためにクラシックスへの近寄り、迫り方というのが残されていなければならないだろうと思います。そうしたときに初めてヒューマニズムの意味が新たに取り上げられてくるのではないかと思います。ですから、[5]の「ヒューマニズム」のところにまいります。

[5]h)「ヒューマニズム」という語は、日本ではしばしば誤解されて使われていると思います。私はやはり、ヒューマンであると言われるとうれしいのですけれども、ときどき学生たちは、私が喜ばないことで私をヒューマンと呼ぶことがあります。私は酒に弱いものですから、学生たちと一緒にセミナーの後などで飲み食いをしたしますと、ビール1杯ぐらいで赤くなってしまいます。私は、こちらにおられる方で昨日、御講演なされた、藤澤令夫先生と一緒に助教授として九州大学に務めておりました。藤澤先生のほうは全然酔わない。私はその横で真っ赤になって酔ってしまい、「もうあした授業やめたい」などと言いますと、学生たちはよるこんで「固いばかりかと思いましたが先生もなかなか人間的ですね」と言うのです。ですから、私はそうなる酔いが途端にさ

めて、「何を言うんだ、猿だって、カマキリだって、酔うのだと。藤澤先生のようなヒューペルアントローポス(超人)のような人はなかなか酔わないかもしれないけれども、酔うことは動物的だ、人間的というのはそういうときに使うのではない」などと言うものですから、そうすると、「あいつはやはり非人間的な男だ」ということになってしまいます(笑)。

ヒューマニズムというのは、ヒューマンなことを強調する考え、そしてヒューマンなこととは言語を持つ、あるいは言語に生きることだと言ってよしいと思います。動物が音声を交わして、それをサインとして行動しているのを見て、動物にも言語があると言う人がいますけれども、動物の交わしている音声は、動物的音声記号であって、絶対に言語ではないと私は思います。幸いなことに、動物学者もそうっております。

一つの例は、犬山のモンキーセンターの京都大学の研究グループ。ここの猿の研究は世界的にも高く評価されている研究ですから、古典の話のときにも傍注的に使わせていただいてもいいと思います。日本猿は26の音声記号を識別する、人間が識別する限りですから、絶対まちがいないとは言えませんが、少なくとも26の音声記号を使っている。気の早いジャーナリストたちが、「日本猿の言語」と言い出したのですが、さすがに研究者たちは慎重でございますから、それが人間の言語と同じものであるかどうかは調べなければならないということで、調べることにしました。どうやって調べるのかというと、本当にコロンブスの卵とはよく言ったもので、聞けば、「なんだ、そういうことか」ということになるのですが、はらんだ雌猿を群れから離して、そして子供が生まれるのを待つ。仔猿が誕生したそのときに、いくつぐらいの音声記号を母猿と仔猿とで交わすのか見ていたら、生まれて日ならずして26の音声記号を識別したということですからこれは本能的記号です。

確かに人間の赤ん坊もいくつかの音声記号は出しています。おむつの汚れとか、おなかが減ったとか、あるいは気持ちのいい声。これはみな前言語的音声記号です。そう考えてみますと、人間の場合、言語は、生涯習得していかなければならない、学習していかなければならないものであります。しかも言語は、人間の言語である限り、他の言語を学ぶことができます。そして、我々は動物的音声記号を自然に持っていますので、驚いたときに、「きゃっ」と言いなさいなどと教わらなくても、「きゃっ」と言うし、痛いときには、「ウーン」とうめきなさいなどと教わったことは全然ないですけれども、世界中の人がそれに似たような声を出す。動物的音声記号を人間は持っています。

i) だから、ヒューマニズムというのは、言語の粹と

しての古典を勉強する、つまり言語の最高の形をできるだけ勉強していくことが人間的な特色をますます強めることになるので、そういう意味では、言語の粹としての古典を研究するのが人文主義となるのです。ヒューマンニズムという言葉は、1809年だったと思いますが、新しい造語（ネオロジ）でございます。…フリードリヒ・ニートハムマーが、フィラントロピスムス、すなわち人間愛に対して、人間的なことを大事にして、造語した言葉でございます。j)それが、ルネサンス期のイタリアでウマニスタと呼ばれた人々の伝統の意識的復興であるということも理解できるかと思えます。

ですから、先ほど申し上げました、クラシックスを絶対に守っていかなければならない、古典を絶対に守っていかなければならないということは、同時に言語を極めて大事にするということであり、その言語で書かれた宝物としての古典、言語の中でも最も品があって、美しい、そういう言葉を文字に直しているものを大事にしなればならないということになってまいりますでしょう。

[ 6 ]の「20世紀の特色の一つ」に移りましょう。今までの話の連関で、20世紀の特色の一つを見ますと、k)非常に広い意味での、ヒューマンニズムによる東西の古典の相互理解ということが初めて始まった世紀ではないかと思えます。皆様、19世紀の明治の初年のころの、ある外国語の訳をご存じでしょう。訳者に対して失礼な気もしますので、名前は挙げませんが、I would like to kiss you(あなたにキスをしたい)を訳して、美女に向かって「御身の朱唇をひとなめするを得ば」。朱は、朱(あか)いです。朱の唇をべろっとひとなめするを得ば、それが訳だったことを考えてみますと、現在私どもが読んでいる文学は本当に名訳だと言わなければなりませんでしょう。それと同じようなことが多分、外国の初期の日本の小説や古典の訳にもあるのではないかと思えます。

とにかく、20世紀には、最も広い意味での東西の古典を読んで、相互に理解することができるようになりました。日本の場合にはすでに20世紀の前半において、広い意味で現代の古典と言われる小説などがたくさん訳されています。私どもが高等学校の生徒のころから、ロシア文学が好きだ、フランス文学が好きだ、カントがどうのこうのと言っていたものですが、これはみんな翻訳を通じて読んでいたのです。しかし、翻訳を通じてでも、そういうものを理解することができるようになっていったというのは、20世紀の文化的にすぐれたところではないかと思えます。原書への探索はそれが前提で、1950年以後になってまいりますと、いわゆる西洋諸国におきましても、単に中国の文献ばかりでなく、日本の文献がいろいろと訳されるようになって、厳密な意味における古典も訳されておりますが、広義の意味の古典文学になれば、

現代の小説などもたくさん訳されています。

20世紀は、そういう意味においては、東洋の古典で育った人が、西洋の古典で育った人の考え方を理解するようになってきた時代だし、西洋の古典で育った人も、西洋だけに古典があるのではなくて、東洋にも古典があるのだというふうになってまいりました。いわば、ヒューマンニズムの名であっても、言語を大事にするというヒューマンニズムの名であっても、西洋なら西洋の言語の粹を勉強するという意味では、セミ・ヒューマンニズム、半ヒューマンニズムとしてのパロキアリズム (parochialism) と言ってもいいようなものから少しずつ脱却して [ 8 ] に出ておりますけれども、人類に拓(ひら)かれようとする、そういう偉大な20世紀であったのではないかと思えます。まだ全部うまく成功しているとは言えませんけれども、そういう傾向もあるということです。一般に20世紀と申しますと、人権が認められた世紀であるとか、科学技術が非常に進んだ時代であるとか言われておりますが、それと並んで大事なことは、ヒューマンニズムと言われていた実体はセミ・ヒューマンニズムであったパロキアリズム、文化的パロキアリズムが、20世紀において、どうやらヒューマンニズムになろうとしている、そういう時期ではないかと考えられます。

そのことを少し具体的に見てみますと、またおもしろいことがございます。l)例えば、芸術の理念として、西洋では、ご承知のとおり、プラトンやアリストテレスが明らかにしているミーメーシス、すなわちrepresentation、再現が芸術の理念でございます。再現の対象が、場合によってはプラトンが理想とした神のアイデアであるというような再現の仕方もあったでしょうが、一般に再現というと、プラトンが非難したような再現、つまり現実の事物を模写するというものとか、また、アリストテレスの言うように、典型のようなもの、例えば、目に触れる周囲のすぐれた人をもとにして、それよりすぐれた人の典型を考えて、それを模写するとか、模倣の対象を考えるなどいろいろありますが、とにかくミーメーシスであります。

これに反し、エクスプレションという言葉は、expressioというラテン語も、ご承知のとおり農業用語としてはできておりました。ブドウなどの汁を絞り出すという意味のエクスプレシオがございましたけれども、芸術用語としてのエクスプレションというのは、多分18世紀のデイドロのころに少し使われ始めて、今日言われているような「表現」の意味で使われますのは20世紀のことでございます。そういう意味では、ミーメーシスから、内部の心の絞り出し、表現のようになってくるのに二千数百年かかったということです。ゲーテにさえ Ausdruck (表現) という語はありません。

それと同じようなことで、全く逆のことがあります。つまり「写生」という言葉が日本の芸術論に出てきますのは、19世紀のころの渡辺華山が初めてで、これは、中国のある学者の言葉でございます。それにしても、18世紀にでき上がった言葉です。それまでの東洋の絵画、あるいは芸術の理念的な原理は「写意」という言葉で表されているように、内部の心を輝き出させるということでございます。それは謝赫の伝えた品等論で「気韻生動」などという範疇を考えてみましても、確かに、宇宙の気に自分が同一化して、その同一化した内部の気持ちを出さなければならない。だから、詩人でもありましたが、美学者でもあった王維は、「山は何山であるかというアイデンティフィケーションを必要としない。山の絵は、山の気を出せばよろしい」と言います。山の気は、画家自身が「気韻生動」を感じとって、そのような自分の心を出さなければ画面にあらわれてこない、ということで、東洋では芸術の理念が「写意」から「写生」に達するまでに千数百年の時間がかかっているということです。

[7] ということを考えてみますと、実に、m) 理念に関する逆現象の同時展開があるということ認めなければなりません。「逆現象」とは、ミーメシスからエクスペションに、つまり、「写生」から「写意」ということになりませんが、それが、西洋の場合は古代から現代へ、東洋の場合には、「写意」から「写生」へ、古代がエクスペションで、現代がミーメシスになっている、ということです。そしてこの二つの相互に逆方向の現象が同時におきて展開しています。そして、20世紀になって、それが渾融して、日本でも中国や韓国でもいろいろ新しい描き方が出る、同様に西洋でもさまざまの新しい画法が工夫されるということになります。

理念に関する逆現象の同時展開ということが、ヒューマニズムの中でも多々見出されるだろうと思います。ごく簡単に申しますと、エゴロジカル (egological) な個人として、自我論的な個人として、その核にあたるペルソーナ (persona) という観念。このペルソーナ (位格) はキリスト教とともに出てきたのでございますから、古典ギリシアにはありませんけれども、しかし、エゴロジカルな展開ということを考えてみると、ソクラテスのイデアリズムによるプシュケー (魂) はペルソーナの潜勢的な、デュナミック (可能的) な理解であると考えerことはできます。それから、はるか後の市民の契約社会におけるレスポンシビリティ (責任) という徳目の実現に展開していきます。ところが、このレスポンシビリティという単語そのものは、1700年代の後半、つまり18世紀の後半に造語された単語であって、それまではありませんでした。それも不思議なことにフランス語のレスボンサビリテ (responsabilité) もそのころにできていて、

ドイツ語のフェラントヴォルトウング (Verantwortung) に至りますと、19世紀の後半になってもございません。

そういうことを考えてみると、エゴロジカルな個人から、社会的な徳に進んでいく西洋のヒューマニズムの展開と、それから「義」、すなわち告朔之餼羊 (天を祭る月始めの祭りに犠牲として捧げる羊) を我が背負うという意識、つまり天に捧げる共同体の犠牲の獣を自分が選ばれて背負っていく時の気持ちは垂直的には天に対する責任と、水平的には自分をその大事な役目を選んでくれた自分の仲間に対する責任、そういう意味で「義」は責任と言ってよろしいと思います。責任という概念のなかった西洋風の理解により義は正義と同じく justice と考えられていますが、義足とか義齒は、正しい足とか、正しい歯という意味ではなくて、足の責任を果たすもの、歯の責任を果たすもので、それに「義」という言葉を使っているのです。昔からある徳目、仁・義・礼・智・信と言われている「義」は、これでもわかるように、今の語を使えば責任です。ところでエゴロジカルな個人を本当に表す東洋の単語ないし概念は、私の知る限り良知という言葉になって、17、8世紀に造語されてきたという事実を考えてみますと、概略的に申しますと、ヒューマニズムの教える古典的な文献を辿ってみると、東西の文化圏で道徳の領域でも基本理念に関して逆現象の同時展開が認められ、確かに東西の古典は相補性の関係、お互いに相補うようなメリットを持って古典時代から20世紀まで進展してきています。

n) こういうことで、文化的存在性とか、相互の相補性を確認しなければならないと同時に、それならば、全く違うのかということそうではなく、そういう大事なものを、それぞれ一側面ずつであっても開拓しており、その完成のための他の側面を探し求めていたということに、人間としての大事な価値を、位相的には違うにしても、東西の文化が求め合っていたという同一性を確認することもできるのではないかと思います。そういうふうを考えますと、東西のおのの古典文化は、初めて人類に開かれているところのパロキアリズム (局地的ヒューマニズム) であるということが明らかになる私どもの古典研究という精神的営みには、こういう事実の意識、すなわち、東西文化についてひとつの古典文化の非充足性と、それにもかかわらず、両者のもつ相補性の性格を認め合うことが大切でしょう。

新しいミレニウム (millennium) を迎える時代に入っで、ちょうどここで従来、西洋古典とか、東洋古典とか、そういう中でも中国古典とか、ギリシア・ローマ古典、キリスト教の古典といろいろ分かれて、全く別々に扱われていたもの、さらに区分されて各国の古典と分かれていたのが、古典学の再構築という試みが出てきたという

事実は、いわば semi-humanism つまり半ヒューマニズムの意識しなかった従来のヒューマニズム運動の意識改革があったのではないかというふうに考えられます。それはまた、それらの古典学のそれぞれの分野における研究水準が上がってきた結果、まだ知らなければならないような問題がたくさん出てきているからではないかと思えます。

[ 8 ] o) こうなってきた場合に、人類に開かれて、人類の立場から、およそ人間であるならば大事にしなければならない古典というものをいくつか決めなければなりません。それは何か政府の決定のような別の権威の規制によるいい加減な決定とか、あるいは科学の決定のように定量的基準でなければならないというようなことではないのですけれども、古典としてのアクシオロジー (axiology, 価値論) がどこかでまた考えられなければならないことになりそうです。新しいアレクサンドリアのカノンの運動ですから、広い意味における古典、今まで古典と言われているものみんなそうかもしれませんが、その中で最もジェネラルな意味での古典、それからそれぞれの領域に関する古典、そういうある種の基準が考えられなければならないかと思えます。

p) と申しますのは、今や言語淘汰の時代に入っているからです。つまり政治的な言語戦争ばかりでなく、コンピュータのような機械が出てまいりますと、それに有利な言語が非常に強くなっていくということになります。それから政治上の事情もございませう。言語がそもそも幾つあるのかは、数え方によって人はいろいろな原則で分類して数えるため、4000説から8000説までであるという現状です。まるでうそみたいに大違いなので、どれでも三百代言のようだという人もいますが、世界中に方言というものがありますので、それをどの程度整理して数えるかということによって、厳しい人は8000と言うし、おおらかな人は4000と言っているようでございませうが、4000から8000ある言語のうち、トルベツコイの研究グループにいた人から聞いた話でございませうが、3分の2に当たる言語が多分21世紀の半ばごろに滅びるだろうと言われております。

瀕死の状態の言語というのは、私年代 (70~90才) の者が話す言語を、次の年代 (40~70才) の人々は聞いてわかるけれども、自分は話せない。そうすると、私年代の者の孫はもう全く聞いてもわからない。これが、言語の瀕死状態と言うのだそうですが、そういう言語が非常に多く、これから一、二世代のうちに約三分の二の言語が滅びていくかもしれないと言われております。ですから、言語淘汰ということは、民族が戦いに負けるとか、そういうふうなことばかりではなくて、機械文明の世界に生きていくためにだんだんとそうになっていく、そう考

えますと、この説を認めなければならないことになりませう。

ところが、約2000から3000の言語が五、六十年のうちに滅びるということは、どの言語も神話を背負っているのです、何千という神話体系が滅びることにもなります。古典をごく広い意味に考えますと、今のうちに、つまり20世紀が終わって、21世紀の早い時期の間に、人類の立場に立つとするならば、滅びゆく言語の保存についても考えなければなりません。それは、古典と呼んでいいのかどうか分かりませんが、そういう言語の記録とか、保管とか、あるいは保存とか翻訳ををどうするかというような問題もあるのではないかと存じます。

次に [ 9 ] のむすびです。ここでは二つのことだけお話しいたします。先ず q) として、私は、ヒューマニズムとしての古典研究という立場で申し上げました。そして私の古典研究も単なるヒューマニストとしての古典研究でございますので、古典研究そのものの今日的レベルから見ますと、非常に低いものだと思っております。しかし、そういうヒューマニズムとしての古典研究を、高校教育、大学教育、あるいは社会教育の中で、どういふふうにして上手に残していくか、それからヒューマニズムとしての、あるいはヒューマニストとしての古典研究をどういふ形で学問的に展開していかなければならないかということもいろいろお考えいただければと存じております。次に r) としてもうひとつのことは、古典研究は θαυμάσιον (thaumazein) の経験だと思っております。thauma は偉大とか崇高の対象でタウマゼインとは、それに対する讃美や敬仰の意で単なる驚異ではないと思えます。プラトンの『テアイテトス』を見たり、グレーゴリオス・ホ・タウマトウルゴス (偉大で讃美すべきの奇蹟を行なった人グレーゴリオス) というような古い時代の言葉を考え合わせると、ゆきわたっている「驚異」だけとはちがうのではないのでしょうか。古典の讃美がヒューマニストの研究の  $\alpha$  であり  $\omega$  であると思っております。そう思ってよみ直すとアリストテレスのタウマゼインも少し違ってみえます。

質疑応答の時間もありますので、この一時間だけが私のお話しする時間と思っておりますので、これで終わりたいと思えます。御清聴ありがとうございます。

( 終了 )